

# William Somerset Maugham

——英文学における作家としての位置について——

脇 田 勇

- I. Maugham と英文学
- II. Maugham と批評家
- III. 日本における Maugham 研究

## I. Maugham と英文学

Maugham の生まれたのは 1874 年、処女作 *Liza of Lambeth* の出版が 1897 年であることを考えると、彼の作家としてのスタートは、世紀末の唯美主義の思潮の時代、すなわち Pater, Wilde が文壇に君臨した頃であり、大陸ではフローベル、モーパッサン、ゾラの写実主義、自然主義が抬頭しその影響が英国にもしのびより、劇壇ではイブセンがいわゆる「問題劇」によってその革新的意義が論じられていた時代でもあった。1962 年雑誌 *Show* に発表した *Looking Back* という自伝までの年月を考えると 60 有余年にわたって文筆活動を継続し、この間英国皇室は Victoria 女王, Edward VII, George V, Edward VIII, George VI, Elizabeth II と 6 代にもわたり、その間 2 度の世界大戦があつて、社会情勢も変化し、文壇の流れも、世紀末の唯美主義から、20 世紀はじめのリアリズム、第 1 次大戦前の Shaw, Wells, Galsworthy の社会批判の文学、戦後の Joyce, Woolf を中心とした「意識の流れ」派の心理主義文学、また人間の非合理の面を押し出した Lawrence, Huxley の諷刺的な文学、30 年代に入ってから全体主義と自由主義の対決、やがて第 2 次大戦の兆しが濃くなるにつれて文壇の流れも政治主義的となり、Spender, Auden, C. D. Lewis 等の共産主義的詩人がクローズアッ

ブされてくる。第2次大戦後はサルトル一派の実存主義の影響が英国でも感じられ、異常な状態におかれた人間の異常心理の追究、あるいはそこに神を見出し、または虚無の深淵がうかがえる。Greene, Bowen, Sansom がその中心である。

このように20世紀英文学の主流を跡づけてみた場合、Maughamを英文学の中でどう位置づけるということはなかなか困難な問題である。現代においてはMaughamを作家として考える場合、長編、短編のフィクションを主として頭に浮べるのであるが、Noel Cowardとともに劇壇の人気者であったことは銘記されてよい。*Lady Fredrick* (1907), *Mrs. Dot* (1904), *Jack Straw* (1907)の三作は1907年から8年にかけて上演され人気をよんだ。英国のみならず米国においても好評を得て、*Lady Fredrick*は422回、*Jack Straw*は321回、*Mrs. Dot*は272回の上演回数を重ねている。*The Explorer*, *Mrs. Dot*, *Jack Straw*のポスターの前でシェクスピアがうでをくんで、うらめしそうに横目をつかっているBernard Partridgeの諷刺画は、彼の人気のほどを伝えて面白い。*Sheppy*の上演を機に、劇壇と絶縁したのは、劇壇の表裏を知り尽して、もはやそこから得るものはなく、そこに停ることは自己を停滞させ、惰性的にする以外の何物でもないことと、シェクスピアがそうであった如く、新進の劇作家との対決を避けたことによることも想像される。

新局面のいとぐちを第1次大戦に求めたことは注目されてよい。40才のMaughamは野戦病院に志願し、フランス戦線で、砲火の下に身をさらし、まもなくスイスで情報蒐集の仕事に従事し、後にその体験を*Ashenden* (1928)に結実させた。しかし過労のため健康を害し、アメリカで静養し、健康回復とともにゴーギャンの資料を集めるべくタヒティ島に渡り、南洋の自然に接したり、また戦争末期に特殊任務をおびてロシアに潜入したりなどした。戦後はインド、マレー半島、中国、南洋諸島をめぐり、創作の題材を得るとともに、彼の人生模様を多彩なものに織り上げて行った。

Maughamは現代英文学において指導的役割を演ずるとか、新しい問題

を提供するような作家ではなかった。19世紀的なリアリズム特にモーパッサンのような自然主義の手法で書いた *Liza of Lambeth* 以来、リアリズムの作家として終始した。彼を通俗小説家、三文小説家と位置づけることは批評家の自由であるが、ひとつに彼の教養の背景の深さ、広さという点、ひとつには世界のどの作家にもひけをとらぬくらい、ハイブラウ、ロウブラウのいかんを問わず、愛好者を持っている事実を通して、われわれの国で常識的に言う通俗小説家のカテゴリーに入れることには多くの疑問がある。

第1次大戦後の作家たちは、さまざまな実験を試み、観念的で難解な文学が陸続として誕生してくる時代において、同じ技法で押し通して行った Maugham が少なくともジャーナリスティックな意味では批評の対象とされなかったのは当然であったろう。*The Summing Up* の Chap. 58 で語る。

I have no illusions about my literary position. There are but two important critics in my own country who have troubled to take me seriously and when clever young men write essays about contemporary fiction they never think of considering me. I do not resent it. It is very natural. I have never been a propagandist.

「私は私の文壇的地位について見当違いの自惚は持っていない。私自身の国で真面目に私を取上げてくれた批評家は僅か2人だけで、冷嘲な若い人たちが現代の小説について論評を書く場合に、私のことを論じようなどとは、てんで考えないようだ。私は別に怒っているのではない。それはきわめて妥当なことだと思っている。私は宣伝家であったことはないからである。」

Maugham は小説が著るしく物語性を欠き、観念的、思想的になって、下手すると小説だか、政治、経済の論文だか判別に苦しむようになっていることを指摘し、その是正には傑れた文芸批評家が出て、小説の領域をもう一

度規定するとともに、単に小説本来の領域ばかりでなく、人間の精神活動の各分野が、それぞれに本来の立場を守るように指導することを期待している。

*The Summing Up* の Chap. 58 で第2次大戦後の新しい文学の手法とそれを用いた作家について次の如く論評している。

They have thought that they were learning something when they read novels in which the characters delivered their views on the burning topics of the day ... The novel was regarded as a convenient pulpit for the dissemination of ideas, and a good many novelists were willing enough to look upon themselves as leaders of thought. The novels they wrote were journalism rather than fiction ... The intelligent critics, the more serious novel readers, have since then given most of their attention to the writers who seemed to offer something new in technique ... Of the other experiments that have been made the most important is the use of the stream of thought ... It was inevitable that psycho-analysis should captivate their fancy. It had great possibilities for the novelist. He knew how much he owed to his own unconscious for the best of what he wrote, and it was tempting to explore great depths of character by an imaginative picture of the unconscious of the persons of his invention. It was a clever and amusing trick, but nothing more ... It almost looks as though their authors had been driven to these contrivances by an uneasy consciousness of their own emptiness. The persons they describe with all this ingenuity are intrinsically uninteresting and the subjects at issue unimportant ... It may be that the interest that has been taken

during recent years in every form of technical experiment in the arts points to the fact that our civilisation is crumbling ...

「作中の人物が現代焦眉の問題について、見解を述べる小説を読むと、彼等は（読者）何かを学んでいる気になった。…小説は思想伝達の便利な説教壇と見なされ、多くの小説家は、喜んで自分を思想指導者と思った。彼等の書く小説は、フィクションではなく、むしろジャーナリズムであった。…知的批評家、もっと真面目な小説読者は、それ以来、手法に新しいものを与える作家に注意の大部分を向けた。…最も重要な実験は、意識の流れの使用である。…精神分析が彼らの空想をとらえるのは不可避なことで、小説家にとっては大きな可能性を持っていた。自分自身の潜在意識に負うところ、いかに多いかを知ったので、自分の創造した人物の潜在意識を想像ゆたかに描くことによって、性格のもっと深い奥底をきわめることは誘惑的であった。それは巧みな興味ある技巧であるが、それだけのものであった。…そうした作家が、自分自身の空虚さを意識して不安になり、そのためにこのような工夫へと追いやられたかのように見える。こうしたあらゆる精妙さをもって、彼等が描く人物も、本質的に興味のないものであり、書かれている問題も、くだらぬ問題である。…この数年間、芸術における技巧的実験のあらゆる形式に寄せられた関心は、われわれの文明が減びつつあることを指すものかも知れぬ…」

Maugham はラテン作家を主とする古典文学、ダンテの如き中世文学、特にルネサンス期のスペイン文学、17世紀のフランス古典劇、とくにラシーヌとモリエール、それにゲーテからロシア小説に至るまで、驚くべき語学力で古典に親しみ、よく消化していた。そしてこれらの読書から得たものは、彼の文学に何らかの意味で血となり肉となって生きていると言える。読書の範囲は文学のみに限定されず、医学、哲学、歴史についても驚異的な読書力

をもって涉獵していることも考慮に入れるべきである。彼がフランスで生まれ、幼少の頃からフランス語を英語より正規に学んだことは彼の文学が英仏の二重国籍的であることを裏づけている。特に影響をうけたのは、古典劇作家、モラリスト、19世紀のリアリストからである。彼の主張として、物語は初、中、終を持っていて筋が明確な線を描いて進展し、完結するのを良しとするのは古典派の伝統をひくものであり、簡明、自然を尊ぶのも、彼の合理主義とフランス古典の素養に基づくところが大であると思われる。Maughamは生涯を通じ何を描こうとしたのであろうかと問うた場合、恐らくその答は人間を描いたのだと断定してまちがいなからうが、このようにテーマが人間自体であることもモラリストの伝統とともに古典派のそれとも考えられる。

モンテーニュとかパスカル、特にラ・ロシュフコやラ・プリュイエールの如きモラリスト、なかんづくロシュフコに負うところが大である。モーパッサンからはじまり、スタンダール、バルザック、ゴンクール兄弟、フローベル、アナトール・フランスへと向い、これらの作家を英国の作家より研究したことは *The Summing Up* で自ら述べている。

Maugham が英文学を多少規則的に勉強したのは1892年からはじまる医学生時代で、当然独学であった。医学生になる前、ハイデルベルクの遊学時代、同宿していたケンブリッジ出の26才の文学青年の感化をうけて、Pater, Meredith を読んだのが、英文学について指導らしいものをうけた最初であった。

劇作家としての Maugham が誰よりも影響をうけた作家として Oscar Wilde をあげることができる。その影響の最たるものは警句的表現の文体である。しかし Maugham の劇に栄養を与えたのは、風習喜劇の伝統に属する作家ばかりではなかった。近いところでは、Shaw, Galsworthy, Pinero などからも多くを学んだ。

世紀末文学、すなわち芸術至上主義の影響はどうであったろうか。 *A Writer's Notebook* の1933年の項及び *The Vagrant Mood* の「作家の立場が

ら'の中にあらわれた一つのエピソードがその間の消息を伝えている。ボストンのある金持の婦人から、息子作家として修業させたいがどうしたらよいかと問い合わせの手紙をうける。彼は息子に5年間、年あたり1000ドルずつやって勝手にさせるようアドバイスする。たびたびの手紙の交換のあとで、その母親は、息子を証券会社に入れることにしたということで終わっているが、'作家の立場'の方では、その話の結論として、小説家の個性を強張している。個性というのは小説家にとっては商売道具のようなもので、これをつくりあげるには細心の努力をほらう値打ちがある。芸術や文学について、ただ撫でまわしたというにとどまらぬ知識を持たなければ、個性は完成されない。要するに小説家は広い教養をもった人間でなければならないし、そうしてこそ作家はその才をのばし、何によらず自分の書くものを、自分独自の個性のもとに、渾然と融合させて行く力ができてくると語っている。芸術家と紳士とは両立しないという考え方は90年代的で *The Moon and Sixpence*, *Theatre* はじめ多くの長編、短編のテーマをなしており、その場合芸術家の私生活の俗悪さと至高さとが対照的に取扱われている。

小説家としての Maugham に英国のどんな作家が影響を与えたかの問題であるが、簡単に結論を出すことはなかなか至難である。勿論 Maugham がその作品を比較的高く評価した作家として Fielding, Sterne, Austen, Dickens, Brontë, Thackeray, George Eliot をあげることができる。 *Ten Novels and Their Authors* (世界の十大小説) の中でも、Fielding の *Tom Jones*, Austen の *Pride and Prejudice*, Dickens の *David Copperfield*, Brontë の *Wuthering Heights* を取上げていることから実証される。R. H. Ward の言う如く、Maugham は小説においてその本領を発揮した。彼の文学的風土は前述の如くフランス的であるが、以上列挙したような作家からは何らかの意味で摂取したものがうかがえる。例えば Fielding のエッセイを小説に取入れた方法、Dickens の行動による性格描写などはその一例とみることができる。

さて英文学における Maugham の位置づけということは、きわめて難しい問題である。本論の冒頭に述べた如く、彼は Victorian であり、Edwardian であり Georgian でもある。彼の活躍した半世紀余の時期に Meredith から Graham Greene に至る何百人かの作家が輩出している。確かに Maugham は批評家にとって好都合な文学の流派や運動のどれにも属しておらないし、リアリズムの作家であるというような格づけをするには余りにもスケールの大きい作家である。彼が長い間英国の批評家や読者から真面目に取上げられなかったのは、実はそのカテゴリーの不明確さが原因の一部をなしていると思われる。むしろ米国や大陸諸国の大学関係者の間で早くから学問的研究がされてきたのは注目すべき現象と言うべきである。早くは Paul Dottin の *Somerset Maugham et ses Romans* (Paris. 1928), *Le Théâtre de W. Somerset Maugham* (Paris. 1937) があり、H. Papajewski の *Die Welt—, Lebens—und Kunstanschauung William Somerset Maughams* (Köln. 1952), Sven Arnold Jensen の *William Somerset Maugham* (Oslo. 1957) などがある。イギリスでもジャーナリズムで相当称讃をうけたが、まとまった研究書が出たのは1937年出版の Richard H. Ward の *William Somerset Maugham* であった。他の現代作家と比較して、確かに批評家や若い作家たちから取上げられることが少なかった。Maugham は自分が天性の作家でないこと、天翔ける想像力もなく、画家で言えばせいぜいイーゼルにのる程度の絵を描くくらいで、壁画など描く柄でないと述べたり、またよく引用される如く、*the front row of the second-raters* (二流作家の前列) に位すると自己批判をしているが、その評価を文字通りに受けとることは危険である。「自分は作られた作家である」と言っているが、これは彼のエッセイの中で語っているような意識的な文章修業の意味に解すべきで、よしんば生まれながらの作家でなくとも、その資質の中に作家的要素のあったことは疑えない。Maugham 家の系譜の中には文学的素質が流れていることは、Maugham の死後、彼の甥 Robin Maugham の書いた *Somerset and All the Maughams*

(1966)にも記されてある。リアリスティックで論理的、科学的精神（これは医者としての修業に負う所のあることを自らも述べている）とフランス的良識とをもって、英仏の散文を研究し、質量ともにすぐれた作品を創り出したと考えるのが妥当であろう。

Maugham の位置づけを困難にしている原因はいくつかあげることができる。彼の態度が主観的態度と客観的態度の中間を低迷していることである。別な表現を用いれば、唯物的でありながら神秘的なものに惹かれるというような点である。

また彼が大衆の間にあまり人気があったことが、彼にはマイナスの作用を及ぼしたことである。どこの国の作家に対しても、批評家は、このような場合、意識的にさけて通る傾向がある。大衆を楽しませると同時に、やかましい批評家やインテリ読者をも満足させるという作家として望ましい地位に到達するには長年月を要したのであった。

当時劇作家では Shaw, Galsworthy, Granville-Barker あり、小説では Wells, Bennett が重要な位置をしめ、一方 Henry James と Joseph Conrad とは小説のスタイルと精妙さを重視する読者に偶像視された。Maugham は当時を回顧して「文壇が私の作品を少しも重んじてくれなかったのは至極当り前だと思う。何故なら劇の方では伝統的な型で満足していたし、小説の方では新石器時代の人間の洞穴の中で火を囲んで語る話し手の技法に溯ったのだから」と述懐している。たしかに技法、スタイルに関する限り、読者に鮮烈な印象を与える種類の作家でなかったことは想像に難くない。

Shaw や Galsworthy が社会とか政治に関心を持ち、社会機構の欠陥に注意をむけ、階級というような集団に興味を持ったのに、Maugham の眼はもっぱら、個々の人間の愚かしさ、またその矛盾のかたまりのような人間のおりなす多彩な生態を飽くことなく追求して行った。社会機構の欠陥を摘出したり、階級闘争を扱う実践的な人道主義の作家こそ真の作家ととられると、Maugham の如き作家は自然軽薄な瑣事にのみかかわり、皮肉で非建設

的な作家と言われるのは当然でもあった。

ビクトリア朝が終り、南阿戦争の屈辱を経て、当時の英国人には世界が狭くなった感が強く、大陸の文明が今までになく強く意識されるに至る。イブセンが West End で上演されており、ハウプトマン、ストリンドベルヒも紹介され、ドストエフスキ、ツルゲネーフ、トルストイが読まれ、さらにスタンダール、フローベル、モーパッサンに対する熱狂ぶりは若人の間では熾烈であった。

そのような状況下にあつて、彼より年下の作家が独自の個性とスタイルをもって進出してきたのである。すなわち伝統的な殻をまったく破った無定型な流動的な作品を書きはじめた。1915年に Maugham の代表作 *Of Human Bondage* が出た時も、その真価は認められず、*The Moon and Sixpence* が1919年に出て好評を得てはじめて、読みなおされるというような事実も、この時代風潮を反映していると言える。Lawrenceこそは、人生、性、芸術における緊急なあらゆる問題を解明してくれる天才的作家、またフロイドのように秘められた世界をのぞかせてくれるというふうに見られるのである。しかし冷静な人生の観察である Maugham は特に無意識の世界や意識の流れを追求することにはそれほど興味を示さなかった。

*The Moon and Sixpence* においてはじめて Maugham は自分の本領を発揮したのであった。作家として油ののった45才の時である。人間観察にも深みを加え、人生観にもゆとりができ、技法の面でも一人称小説の型を用いたり、時間の自由な転換を利用したりして、Maugham は、はじめて自分の進むべき作家の道を発見したかのようである。Woolf, Joyce, T. S. Eliot は皆内的に沈潜していったのに反し、Maugham は Kipling や初期の Henry James の如く 舞台脇から説明する 楽な方法を用いた。心理小説の効果に無関心ではなかったが、モーパッサン流に人物の心理を行動によって描く方法を探って、意識の流れを追求することをしなかった。彼はチェホフのすぐれた点を認めながらも、筋が初、中、終と一貫して話の面白いモーパッサンを

よしとしたので、チェホフにひかれていたインテリ層にモーパッサンが低俗に見えたと同様、Maugham が低俗に見えたとはうなづかれる。

1922年に出た Joyce の *Ulysses* と T. S. Eliot の *The Waste Land* は戦後の幻滅の時代のインテリを引きつけたし、主知的な A. Huxley が思想の混迷の中にあつた人々に救いと神としてあがめられた。批評家としての Woolf は Bennett, Wells, Galsworthy を攻撃し、読むに値する意義ある作家として Joyce, E. M. Forster, Lytton Strachy, Lawrence 及び T. S. Eliot をあげ、Maugham を無視した。

1930年に出た *Cakes and Ale* は Maugham が円熟の域に達したことを示す作品で、彼自身も自作の中で最もよくかけたと自負する傑作であるが、その登場人物の中主役2人が実在の作家（実は Hugh Walpole と Thomas Hardy）をモデルにしているということで、センセーションをまきおこした。Swinnerton は *The Georgian Scene* (1934年) で、Maugham を真面目な作家として取上げるに至った。

1933年 Maugham は劇作の筆を断つことを宣言しているが、前述のような理由によるとともに、より自由な小説の創作に専念するための、この作家らしい計画的な行動であつた。この頃 Spender や C. D. Lewis の如き新進の詩人が活躍しだす。そして政治——ファシズム、自由主義、共産主義——が文学者の大きな関心事となる。*The Waste Land* 以後の新詩運動の中心人物 Auden は Isherwood とともに左翼的な政治色を打ち出す。

第2次大戦後は第1次大戦後に見られたけんらんたる文学活動は見られなかった。詩も散文もハイブラウむぎの抽象的な作風でなく、現実的な書き方が喜ばれるようになってきた。その意味で Maugham の作品は脚光をあびる次第となつたのである。明確で簡潔でしかも音調のよさを創作の題目としていた作家 Maugham を歓迎する傾向が出てきた。

さて Maugham は英文壇と没交渉に動いていたかのようであるが、それでは時流に逆らつて動いたかというとは決してそうではない。*Liza of*

*Lambeth* (1897) から *The Razor's Edge* (1944) に至るまで仔細に観察すると、移り行く文壇の流れに目立たぬくらい巧みに棹さしていることがわかる。

## II. Maugham と批評家

Maugham を立派な作家として賞賛する批評家のいることは事実であるし、また極端に三文文士と軽蔑する批評家のいることも事実である。ある程度彼の評価が固定するまでは、むしろ無視されたと言った方が妥当であろう。Maugham 自身も、自分の著書についての批評、会見記事、新聞雑誌に連載されている自分の作品についての批評をほとんど読まなかったようである。彼は語る。「私は文学界が私の作品に重きをおかなかつたのは当然だと思ふ」と。戯曲においては伝統的な様式で書くことの気楽さを感じたし、小説家としては新石器時代の人間の住み家であった洞穴の火を囲んで、物語をする人間の立場に帰って行ったのである。無意識の精神とか、登場人物の社会的、経済的、政治的背景とか、文化の問題というような、新しい小説家たちの関心事に無頓着であったために、James, Galsworthy, Wells に熱狂した若者たちから 35 年代にすでに見過されてしまい、後年の Lawrence, Huxley, Woolf, サルトル, カフカ, カミュの崇拜者たちによって顧みられなかったのである。彼等は単なる story-teller には満足できなかった。1920 年代において、また次の 10 年の前半において、左翼の批評家たちは相当注意をもって傾聴されたが、彼らもまた次の時代の保守的な批評家たちと同じように、Maugham の存在を知らないように思われた。

批評家は 'competent' (能力がある) という表現を用いる。公式的に作られた芝居を評する時 'well-made' (よく作ってある) という言葉にふくませると同じ軽蔑的な意味をもって、Maugham の作品に、その表現を適用してきた。'readable' (読んで面白い) という非難がしばしば彼に向けられる。Maugham を弁護する人たちは、Maugham を readable と批評するの

は Chopin の作品は調子がよいと批評するのと同じくらい馬鹿げていると言った。

多くの批評家たちから見て、彼が重要でないというのはこの ‘competent’ というためであろうか。すなわち、初め、中、終のある、実在し得ると思われる人物、適切な会話を備えた、簡単に明瞭に語られているよく作られた話を昔風に好むことに理由があるのだろうか。彼が小説の構成と、手法に目立つような新機軸を紹介しなかったという事実と、また彼が何々イズムとか、何々運動に対して関心を示さなかったことが、彼を無意義としてかたづける結果となったのである。彼の同時代の作家の中でも、Shaw, Galsworthy などは社会問題に関心を示し、貧乏、階級差別、劣敗者の擯取、法律制度、戦争などについて作品の中で言及したのである。彼等は皆真面目な作家であったが、人間自身よりも、人間の住む世界に、より多くの関心を持っていた。

彼の弁護者たちは、もし Maugham が Wyndham Lewis や Hemingway でもよいが、その影響を少しでも示そうものなら、彼に注意を払ったかも知れぬと示唆している。多くの読者からは Victoria 時代の小説の書き直しと考えられている。

すぐれた批評家の David Daiches (1912- ) は *The Novel and the Modern World* で *Sons and Lovers* や *A Portrait of an Artist As a Young Man* について詳しく書いているが、Maugham の作品にはふれていない。G. A. Ellis の *Twilight on Parnassus* と V. S. Pritchett (1900- ) の *The Living Novel* の中では彼の名は言及されていない。Gerald Bullett (1893-1958) は *Modern English Fiction* で Wells について詳しく書いてあるが、Maugham については、短編小説の部においても、一言もふれていない。Walter Allen (1911- ) はいつも明らかに Maugham は職業作家であると書いている。すなわち ‘professional’ という表現は、‘competent’ とか ‘readable’ の場合と同じく誹謗的である。Ernest Baker の記念すべき 10

巻の *The History of the English Novel* の中にわずか2回だけ Maugham について言及があるだけである。Joseph Warren Beach は *Twentieth Century Novel* で Maugham の小説について論じていない。H. J. Muller の *The Modern Piction* では、Maugham は 'novelists of the center' (中立派の小説家) と一緒に分類されることによって、重要でない作家の立場に置かれている。Edward Wagenknecht (米書評家) の *Cavalcade of the English Novel* は600頁の長編でありながら、Maugham はわずか脚註で扱われているにすぎない。

Maugham は 'My own native gifts are not remarkable' とか 'My writing is a harmless habit that happens to be profitable' とか、また 'I know just where I stand: in the very front row of the second-raters' と語り、彼らしい皮肉な調子で自己批判をしている。しかし Maugham は *The Summing Up* の Chap. 60 で「作家が批評をどの程度まで考慮し、どの程度まで無視するかを決定するのは、微妙なところである。イギリスは、くだらない政治家の自伝とか、高等淫売の生涯などは重大な批評的敬意をうけながら、小説は5、6編ずつ一束にして批評される。このため小説家が自分の作品の批評から、自分自身の発展に有益なものを拾い出すのは困難になっている」とちょっぴり苦言を呈している。

Maugham に対する批評は功罪半ばするとも言えるが、Richard Cordell の *Somerset Maugham* に示されている如く、*The Razor's Edge* の売り上げが500万部とか *Of Human Bondage* が Modern Library 版で、他の書全部の売上げを凌駕すると伝えられ、よく読まれている事実は否定できない。英、米、仏以外で Maugham の読まれている国として、Cordell は南米、トルコ、日本、イタリア、スペイン、ロシア、ポーランド、チェコスロヴァキアをあげている。

彼の創作した32編の戯曲は、笑劇、軽喜劇、風習喜劇、問題劇、悲劇と多岐にわたり、全体としての評価は難しい。それに商業的に成功をおさ

め、人気がありすぎたために、批評家をして過小評価させるか、少なくとも公平な評価を妨げたことも事実である。第1次大戦の勃発の1914年までに5編を書き、大衆の人気を集めたが、多くの批評家、インテリからは、文学的価値より、多数の観客をつかむことにより関心を持つ作家として見離された。1915年作の *Our Betters* は New York での初演で注目され、1923年 London で上演された時、*New Statesman* 誌は社交界をモーパッサン流に暴露したものと評し、Maugham の手腕を買った。1919年の *The Circle* は Maugham の戯曲の傑作として定評を得ている。しかし Maugham の劇を非難する批評家たちは、ウィットの軽薄なこと、同じことの反復の多いこと、あまりにも技巧的であること、人物を描写する力のないこと、問題を提示しながら解決をさけること及び思想性の欠如をあげている。

英国で出版された最初の Maugham 研究書の中で R. H. Ward は、小説は Maugham 作品の華であり、小説において Maugham の真骨頂が発揮されているという。1897年 *Liza of Lambeth* が出た時、Edmund Gosse はじめ少数の著名な批評家や友人、*Yellow Book* の連中から喝采されたが、一般の批評は好意的でなかった。むしろフランスの批評家の間で好評を博したのであるが、それはバルザック、フローベル、モーパッサンなどフランス自然主義の系列の中にあっただからである。英米の批評家の多くがその真価を認めたのは30年代以降のことである。それから *Of Human Bondage* の出るまでの7編の小説は余り評判にならず、*Mrs. Craddock* (1902) だけは、夫婦生活の性愛と憎悪を大胆に描写したため Heinemann 社を躊躇させた経緯もあり、かなり評判になった。Pinero, James, Shaw, Galsworthy, Granville-Barker, Wells, Bennett, Conrad がおり、彼より若い Woolf, Joyce, Lawrence の活躍した時代、一種の教養小説ともいうべき *Of Human Bondage* が認められなかったとしてもうなづける。*Times Literary Supplement* も月並な批評しかしていない。ところが米国で当時権威ある批評家と目されていた Dreiser のきわめて讚美的な批評が *New Republic* 誌に載せら

れた。Dreiserはこの小説を強烈な感情の自然に溢れてなったもので、批判すべき何物もないと絶賛した。Garson Kaninの*Remembering Mr. Maugham* (1966)の中でもKaninに向ってMaughamは「ドライザーは私の著書を大いに助けてくれた。それについて書き、熱意をこめて長々と賞讃してくれた。当時ドライザーは強力な地位にあり、彼の発言は千金の重みがあったと聞いている。ところがドライザーの作品のどの一つも読みおえてなくて申訳なく思っている。どうも恩知らずの行為であるが、実際は、有難く思っているのだ」と往時を回顧して語っている。1925年Carl Van Dorenがこの書を今世紀の多くの自伝小説中の白眉と激賞した。英国ではDesmond MacCarthyが、彼を秀れた作家として批評した最初の人であろう。*The Old Wives' Tale, Farewell to Arms, Kipps, Babbit*と共に後世に残る小説と評したのは1933年であった。

1920年代に入って戦後の幻滅の時代のインテリは*Ulysses, The Waste Land*やHuxleyの諸作品にひかれ、Woolfの如きはMaughamを無視したことは前述した通りである。単なるstory-tellerでは満足できず斬新な手法を用いた新しい文学の表現を企図した作家たちを読んでいるハイブラウの間に、Maughamがうけいれないのは当然のことであった。1930年に出た*Cakes and Ale*は英米の批評家も彼も最大傑作と見なす所に到達している。Cordellも、豊かな人物描写、過去と現代との巧みな使いわけ、物語の温情味と陽気さをあげ、近代小説の傑作の一つとしてその地位を確定したと述べている。*The Narrow Corner* (1932)はMaughamの作品中、最も低く評価された作品とCordellは言っているが、それはその当時、社会的に意味を持つ作品のみが重視される傾向があり、批評家たちが熱意ある態度を示さなかったのである。最後の長編のひとつ*The Razor's Edge* (1944)は第2次大戦中米国で執筆したもので、非常な好評を得、Maugham 70才にして健在ぶりをあらわし、映画化もされた。彼の100編をこす短編小説についてCordellは今世紀最も広く読まれた短編作家と称している。チェホフやMansfieldが

インテリに歓迎されていた時代、モーパッサン風に、人生のドラマを狙って、心理やムードを追求せず、人物の行為や事件の面白さ、偶然性を取上げた作風ゆえに、批評家を満足させなかったのは当然である。簡明な表現、感傷の排除、性愛の率直な描写が英国の読者を満足させなかった面もある。英国で人気が高まったのは1951年に短編集3巻が出版されてからである。英国の批評家 Harold Nicolson や米国の Christopher Morley は彼を短編の大家と呼び、Cyril Connolly は現存の最も偉大な短編小説家と激賞したのである。

Maugham の価値を認めない批評家の最右翼として、Edmund Wilson にとどめをさす。 *Classics and Commercials—A Literary Chronicle of the Forties* (W. H. Allen, London, 1951) の記述から Maugham 評をさぐってみよう。彼は語る。「私はたまたま出会った審美眼をそなえた人から Somerset Maugham は真剣に取り組む必要があると何度か言われたが、この作家が二流以上であるとどうしても考えることはできない。彼の新作 *Then and Now* (1946) は——Maugham の作をせめて一冊は終りまで読み通したと言えるためだけでもと思って何とか最後までたどりつこうと誓ったのであったが、その前半の各ページに、何とかして私の進捗を妨げようものと、何とも読むにたえないような字句を密林の如く用意していた。これではとても志を達することはできないと私は何度考えたかも知れない。陳腐なきまり文句の驚くべき連続で、しまいにはよくもまあこうきまり文句ばかりたくさん集められたもの、またよくもまあこうまで、個性的表現では何ひとついえないものと、そのほうに驚嘆をおぼえた。Somerset Maugham の礼讃者たちは、この拙文（もとは1946年6月8日 *New Yorker* 所載）は Maugham を誣るものとして抗議し、短編を読んでほしいと求めてきた。そこで私は短編を集めた *East Is West* を手に入れて、何とか我慢して10編ばかり読んでみた。これらはたしかに読ませるし、けっこう楽しめるものである。文章も *Then and Now* にくらべるとひきしまっている。平易な言葉で書くときが、Maugham

の本領が発揮されるべきだといえよう。しかし、これらの短編は雑誌用の商品でシャーロック・ホームズ級のしろものである。シャーロック・ホームズの方がまだ文学的品位がある。というのは、まさしくもったいぶるところが少ないからに外ならない。Maugham の場合は、もっと大まじめなテーマをもてあそぶが、その作品は、作りものの動機づけにみちており、これは毎月の誌上にヤマを作るに必要なものである。彼が今日占める位置は、Dickens の時代に Bulwer Lytton が占めたそれに等しいと想像される。なかば三文小説といってよく、文章は拙いのに、文章になどさして関心のない半分不真面目な読者に愛玩されるのである」と。以上の文章を発表した時 Wilson は *Of Human Bondage* も *The Moon and Sixpence* も読んでいなかったことを考えるとその批評の言葉をうのみにはできない。

Cyril Connolly は *The Razor's Edge* を評して「私も私の友人のすべても、この小説を読んで心から喜びを感じたのに、しかもこの作がああも無慈悲な批評をうけているのには面喰うほかはない。われわれは秀れたものを見てもそれを見わけられなくなっているのであろうか。責任は先人主にあると思う——今は消え去ったむかしの長所をかくも見事に戻してくれる書物すべてをおとしめる先人主であり、またわれわれの大部分が、自惚と惰性のきまりきった陳腐な道に、時々とってつけたような憂国心の乱痴気さわぎやら群衆心理のお祭りさわぎやらを色どりに添えただけのものに、たった一度しかない人生をソワソワと消費しているのを見て、それでは明らかに満足できない作家がいると、そういうのに悪口を浴びせずにはいられない先人主である」と Maugham を弁護する。

Theodore Dreiser が *Of Human Bondage* を評した言葉は次のようなものであった。「私には彼が、彼より後にもものを読むことになる多数の人のよろこびを購うために、身代りになって苦しんだ人のように思える。彼自身の意志によってでなく、人生と手をたずさえて悲しみと墮落以外ほとんど何もないところに下りて行かねばならなかったのが彼である。……かぎりな

く苦い杯が明らかに彼の唇に押しつけられ、その最後の一滴まで彼は飲みほさねばならなかった。そういうことのおかげで、一人の人生の苦しみと喜びを織り上げたみごとなじゅうたんを、われわれは見ることができるのだ。両手両足に釘を打ちこまれた人と、現実にもわれわれは歩みともに語っているのかも知れない。」

Cordell はその著 *Somerset Maugham* を次の一節で結んでいる。「新批評が Joyce, Proust, Faulkner, Kafka, Camus, James などに授けたような最高の榮譽は与えられないにしても、Somerset Maugham は、彼の崇拜者等を自慢してよいのである。W. H. Auden, Frank Swinnerton, Theodore Dreiser, Max Beerbohm, Christopher Isherwood, Desmond MacCarthy, St John Ervine, Carl and Mark Van Doren, Richard Aldington, Mary Colum, Cyril Connolly, Harold Nicolson, Glenway Wescot, V. S. Pritchett, William Rose Benét, S. N. Behrman, その他大勢の作家仲間たちのような崇拜者がいるということをおそらく文芸批評というものを知っていようとなかろうと、そんなことに無頓着な幾万人の識者たる読者に、たのしみをあたえて来たという事実を彼は同じ程度に誇りにおもっているであろう。彼らは書物のカバーの W. SOMERSET MAUGHAM という文字が必要な保証を提供してくれると信じている。」

### III. 日本における Maugham 研究

1934年すなわち昭和9年に研究社は「現代英文学叢書」26冊の註釈本を発刊した。筆者が Maugham の名を発見した最初は、その中の一冊 'Our Betters' と 'The Circle' の二つの戯曲の作者としてであった。それまでの間に、*Of Human Bondage*, *The Moon and Sixpence*, *The Painted Veil*, *Cakes and Ale* などの長編小説、*The Trembling of a Leaf*, *The Casuarina Tree*, *Ashenden*, *First Person Singular*, *Ah King* などの短編集、*On a Chinese Screen*, *The Gentleman in the Parlour* などの旅行記が出ているにもかかわらず

ず、戯曲二編が選ばれたのは、恐らく散文作家としての位置がまだ確立していなかったためと想像される。その頃、かくれた Maugham 愛好家はわが国にもいて、ひとり楽しんで読んでいたと思われるが、中野好夫訳の「月と六ペンス」が出版されたのは、かなりあとの昭和15年であったと記憶する。A. Huxley と取組んでいた頃なので、この迫力を持った作品は、中野氏の名訳とともに忘れ難い。Maugham 愛好家が飛躍的にのびたのは、第2次大戦後で、洋書の輸入許可とともに、彼の諸作は愛読者を増していった。新潮社は昭和30年「サマセット・モーム全集」を刊行し、文庫版の翻訳も多く出されている。Richard Cordell は *Somerset Maugham* の中で、彼の全作品の翻訳の出たこと、インテリの間においても崇拜者のいること、1959年には4万人以上の人々が(主として学生、教師たち)10日間にわたった「モーム展示会」に出かけたこと、また1960年、1月25日の Maugham の誕生日に「日本モーム協会」が50人の英文学者を発起人として、発足したことなどを報じている。日本では、Maugham は最も広く読まれている外国の作家としてだけでなく、彼は大作家とみなされているとも記されている。

研究書もいくつか出ており、中野好夫編「モーム研究」(英宝社、1954)、上田勤著「モーム」(研究社——新英米文学評伝叢書——1956)、後藤誉士・増野正衛編「モーム研究」(新潮社——サマセット・モーム全集——1959)が代表的である。研究論文に至っては相当の数にのぼるものと推測される。諸外国の Maugham 研究家の著書の翻訳もかなりの数にふえている。1959年の11月に Maugham は晩秋の日本で約1カ月の休日を楽しんだが、この頃からブームはさらに拍車をかけられた感がある。一度その魅力にとりつかれると、なかなか離れ難いというのがこの著者の持つ魔力のようなものである。生涯を通じて描きつづけた人間探究の成果に、われわれ読者が共感を覚えるとともに、彼が常に念頭において創作した信条——すなわち読者を楽しませるといふペースにいつしかのせられているのだとも言えるのである。